

平成 26 年度 学校評価 関係者評価票

学 校 名	兵庫県立千種高等学校
-------	------------

1 学校教育目標

夢をかたちにする進路指導のより一層の充実をはじめ、全生徒・保護者の本校に対する満足度をこれまで以上に高める様、特色と魅力に満ちた教育を推進する。

2 重点目標

- ①地域・保護者に期待され、信頼される魅力ある学校づくりを推進する。
- ②確かな学力・豊かな人間性をそなえ、進路実現に向けて努力する生徒を育成する。
- ③教職員は生徒に夢と自信を与えられるよう粘り強く指導し、また自らの資質能力の向上に努める。
- ④互いを認め合う望ましい人間関係を築き、安心・安全な学校環境を構築する。

3 自己評価結果（5段階評価：「5」が良くできている、「1」はできていない）

実践目標	実践項目	26年度評価	26年度中間(7月)	昨年	一昨年	課題・改善策等	自己評価、改善策の適切さに関する学校関係者評価
地域・保護者に期待され、信頼される魅力ある学校づくりを推進する。	ホームページの充実・改善を図り、学校の様子を随時発信する。	4.4	3.9	4.5	4.6	ホームページのリニューアルと積極的な更新によりアクセス数は増えた。部活の様子をもっと充実させる必要がある。動画をUPする。更新の負担が偏らないよう、職員研修を実施する。	<ul style="list-style-type: none"> ・千種町幼小中高ふれあい文化祭で高校生演じた小中学生向けの情報モラル啓発劇場は、優れた取り組みで、今後も続けてほしい。また、千種町以外の実粟の小中学生にも見せたい内容だ。 ・保幼小中高連携一貫教育により、千種町内では学校の良さがPRで来ているので、今後は町外への発信にも工夫するべき。 ・前向きに取り組まれていると思う。先生方の熱意を感じる。 ・「千高街の駅」で高校生が商店街の活性化に貢献できればよい。 ・高齢化の進む学校周辺地域では、ネットの活用状況は必ずしも高くないことが考えられる。更に地域に理解される学校を目指すには、実粟市の広報紙やしーたん放送（有線放送）、ラジオ・テレビなどのマスメディアを活用することも重要である。
	学校行事、授業参観等を実施し、開かれた学校づくりに努め、その感想や意見を学校経営に役立てる。	4.2	3.5	4.1	4.1	11月のオープンスクールの内容を工夫して、来校者を増やす。文化祭、連携マラソン大会は多数の来校、応援があり、地域の本校に対する関心は高い。地域連携防災訓練を継続する。行事ごとに来校者にアンケートを依頼する。さらに授業をオープンにするなど、本校が地域交流の場となる工夫を模索していく。	
	生徒が地域と関わる機会を増やし、地域社会の発展を願う気持ちを高揚させる。	4.5	3.8	4.4	4.8	生徒が地域と関わる機会を増えている。「千高街の駅」を生徒主体で運営していく。秋のふれあいフェスタその他の行事にボランティア部が参加する。	
	千種中学校区の児童・生徒との交流を深め、「行きたい高校」として本校の存在を身近に感じさせる。	4.1	3.5	4.2	4.1	理科、英語等連携授業を行った。その他の教科も、働きかけの機会を中学校のみならず、小学校に対しても増やしていく。部活動の連携など生徒同士が触れ合う場面も重要。	
	千種町幼小中高連携一貫教育推進事業との連携を深め、まちづくり活動を推進する。	3.9	3.4	*	*	高校版「家庭学習の手引き」が完成したので、内容を徹底して生徒の家庭学習を推進する。生活調べ系統表には高校もあるので、学習系統表にも加える。「千高街の駅」をうまく運用する。	
	行事や授業を通じて「連携型中高一貫教育校」の定着、発展を図る。	4.1	3.7	*	*	授業など行事以外の連携一貫教育を充実させる。小中の先生も高校のオープンスクールにきてもらう。	
確かな学力・豊かな人間性をそなえ、進路実現に向けて努力する生徒を育成する。	挨拶の励行等基本的な生活習慣および品格ある自覚した行動の確立に努めさせる。	3.8	4.0	4.0	4.6	明るく元気に挨拶することができない生徒がある。生徒会主催「挨拶運動」期間を実施する。家庭との連携を強める。	<ul style="list-style-type: none"> ・豊かな人間性の育成に力を入れ、挨拶の指導等に力を入れてほしい。 ・登下校時のあいさつは、学校園を基盤に、地域をあげてさらなる啓発が必要である。 ・挨拶ができない生徒の原因はスマホ依存や親の送迎等、家庭のしつけの問題でもあるのではないかな。 ・望ましい基本的な生活習慣の確立には家庭との連携が大切なので、「生活調査」をきっかけとして改善を促す。 ・部活動は生徒数が少ないので3年の引退後は寂しくなるのはやむを得ないのではないかな。他校との合同チームも検討するべき。 ・先生方は生徒の希望を実現するため、熱心に指導されている。 ・個人競技の部活動を作ってほしい。美術部・書道部等の文化部の充実を。 ・校外での部活動は保護者の協力を得る。 ・「生徒の発表の機会を増やす」とあるのは必要なことであり、今後さらに発表の場を増やして欲しい。 ・部活動は、小中高連携して育成強化できる仕組みを考えることができればよい。 ・部活動の兼部を認めて大会に参加できるようにしてほしい。
	インプロ学習・教科指導を通して、生徒が自己の意見を論理的に明確に表現できるよう指導に努める。	3.8	3.5	3.3	3.8	インプロ学習、就業体験等について、生徒自らが体験し、学んだことを全校集会等、自ら発表する機会を増やす。インプロの成果を活かし、ふれあい文化祭で啓発劇「インターネットの落とし穴」を成功させた。ビブリオバトル、ディベート等もやってみては。	
	地域貢献活動、就業体験、ふれあい育児等の体験的活動を多く取り入れ、生徒個々の自己有用感を高める。	4.1	3.8	4.1	4.3	生徒が自主的に考え、行動する体験的活動にするとともに、事後に生徒同士が感想等を発表し合う機会を設ける。アクティブで地域貢献活動を取り入れる。	
	部活動、委員会活動への参加を積極的に推進し、充実した高校生活を支援する。	3.6	3.8	3.9	4.1	部活動が低調になりつつある。生徒数を考慮し、部活動の数を見直すか、外部コーチの導入の可能性について検討する必要がある。放課後の会議の数を減らす。補習とのバランスをとることが必要。全教員によるサポートが必要。部活動の整理も必要。	
	LHRや面談等を通じて、主体的な進路選択能力の育成を図る。	4.0	3.8	3.9	3.8	生徒がどのような人生を歩みたいか、そのために必要な知識・技能は何かを考えさせ、具体的かつ詳細に指導していく努力を怠らないよう努める。面談を実施する。進路指導室を生徒に開放してはどうか。	
※	体育的諸活動を通して、心身を錬磨し、将来の社会生活でたくましく生きる体力・精神力を養う。	4.1	3.7	*	*	体育的行事の成功を目指して努力を積み重ね、達成感を得られるよう指導する。	

4 自己評価の実施方法についての学校関係者評価

地域が学校に求めることは、①豊かな人間性の育成、②安全・安心な学校環境、③確かな学力、④郷土愛である。学校は、そのような地域のニーズにこたえるべく教育目標を設定していることは合理的である。その評価に当たり、生徒、保護者、連携中学校の生徒にアンケートを実施し、その結果を踏まえた上で、自己評価していることは妥当である。また評価を点数化しているのは分かりやすい。今後は年度当初にも学校評議員会を開き、教育目標や学校評価の意義などの説明をしておけば、より建設的な議論が可能になる。

5 総合的な学校関係者評価

自己評価、今後の改善策は概ね適切であるので、下記の改善策は実践されることを期待したい。そうすることによって、個に応じた指導を充実させるなど、全国一小さな学校の特色と魅力をさらに伸ばしてほしい。連携型中高一貫教育校に改編され、6年が経過した。これまでを定着期と位置づけ、学力向上を軸として、部活動や生活指導などこれまで以上に連携教育の発展・充実を目指して、中高はもとより小学校やこども園等さらには地域社会とも連携を図り、各種の取組や活動を推進して欲しい。

	実践目標	実践項目	26年度 評価	26年度中 間(7月)	昨年	一昨年	課題・改善策等	自己評価、改善策の適切さに関する学校関係者評価
10	教職員は生徒に夢と自信を与えられるよう粘り強く指導し、また自らの資質能力の向上に努める。	各教科において、授業研究など学習指導について工夫・改善がなされている。	4.1	3.6	4.0	3.4	教科の内容を充実させるために、わかる授業のあり方について多方面から考察していく。持ち時間の偏りをなくす。英語の小中高の研究会を他教科でも実施する。	<ul style="list-style-type: none"> ・個に応じた学習指導、進路指導の努力は素晴らしい。 ・少人数の良さが生かされている。 ・各教科の学力向上を目指した、実のある小・中・高の連携が課題である。 ・「公開授業週間」を実施し他教科の授業を参観し意見交換を行い授業改善を進める取り組みを継続させることが大切だ。 ・家庭学習を習慣化できない生徒が多くいることについては、小中学生に配布されている「家庭学習の手引き」の高校版を作成したのであれば、それを生徒に徹底していく必要がある。 ・全家庭訪問をして保護者との意思疎通を図ることは大切で、有意義である。 ・進路選択では「3年間を見通した計画的な指導体制」のもと、生徒と保護者、担任と面談を数多く実行してもらいたい。
11		教科の枠を超えた授業の公開や研修会によって相互に研鑽する。	3.7	3.0	3.7	2.7	学期毎に授業公開週間、研究授業を実施し、実施後に意見交換する機会を義務づける。研修会を計画的に実施する。	
12		地域の人材や素材を活用した特色ある授業の取り組みを行う。	3.9	3.1	3.7	3.9	千種中学校が実施する「千種学」を参考に、これまでの固定化された内容に留まらず新たな分野を開拓し、新たな特色づくりに取り組む。	
13		生徒の実態や能力に応じて、個に応じたきめ細かい学習指導を実践する。	4.4	4.1	4.3	4.1	ベーシック、アクティブコースの授業では授業者のみならず、生徒のそばで授業理解を支援する補助教員のさらなる確保が必要である。チャレンジはさらに学力アップを。教員数を確保する。	
14		課題や宿題の指導を通して、家庭学習の習慣化を図る。	3.4	3.2	3.5	3.1	連携一貫の取り組みの「家庭学習の手引き」「家庭学習調査」を取り入れる。週末課題等の実施点検や、日々の課題を出して家庭学習の習慣化を図る。教科書の持ち帰りを徹底する。朝学or朝読書の時間を設けては。	
15		基礎学力の定着や資格取得のための補習を実施する。	4.2	3.6	4.4	4.0	自己の将来のために基礎学力や資格がいかにより必要であるかということを理解させ、やらされるのではなく、自ら進んで取り組む意識を高揚させる。	
16		家庭連絡や家庭訪問を通して、保護者との情報交換や意思の疎通を図る。	3.9	3.8	4.0	4.0	全家庭を家庭訪問する他、夏季休業中の面談以外にも担任と保護者が面談する機会を増やす。3年間を見通した計画的な指導体制を確立する。	
17		生徒の進路希望を達成するために、情報の収集や提供を行い、適切な進路指導を行う。	4.4	3.6	4.1	4.2	進路指導部と学年との連携を密にして進路LHRの年間計画を策定し、実施する。また進路検討会（進学・就職）の機会を増やす。国公立の推薦指導が弱い。研修会が必要。	
18	互いを認め合う望ましい人間関係を築き、安心・安全な学校環境を構築する。	マナーや規律、規範意識を高める取組を、ホームルーム、生徒会活動等で行う。	3.9	3.5	3.9	3.9	生徒指導部中心に、全教職員の共通理解のもと、全教職員で指導する。その中で、情報モラル向上の取り組みでは生徒会が活躍し効果を挙げた。人権ホームルームも活用する。	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒のマナーや規律が確立されている。学校環境もよく整備されている。 ・生徒の素行が良くなっている。挨拶をはじめ、逢っていて気持ちが良い。 ・社会に出ても通用するような人間関係を生徒が高校時代に築けるよう教員は支援してほしい。 ・携帯電話、スマートフォンの危険性について、関係機関と連携し、定期的に意識付けをするべきである。生徒会も巻き込んで情報モラルの向上に取り組んだことは大いに評価できる。 ・「カウンセリングを1学年の全生徒に体験させる」とあるが、これは是非継続してもらいたい。ただし、カウンセリングを受けた生徒を個々に特定できない配慮をお願いしたい。 ・防災教育、安全教育は学校内のみで取り組む問題ではなく、地域と連携した取り組みを継続して欲しい。
19		生徒一人ひとりの役割や居場所を、クラスの中や様々な教育活動の場において設定する。	3.9	3.9	4.0	3.8	ホームルーム選出の委員に活動の場をこれまで以上に与える。部活動の全入をさらに進める。	
20		生徒の個人面談や、日頃の声かけ指導を積極的に行う。	4.0	3.8	4.0	3.8	1・2学期の個人面談を定期化する。効果的な声かけ、思いが伝わる声かけの在り方について、研修を行う。	
21		防災教育や安全教育を、学校全体はもとよりホームルームで行う。	3.6	2.9	4.3	3.7	ホームルーム計画作成時に防災教育の計画を盛り込む。全教員が防災、安全教育を意識して指導する。地域連携防災訓練を継続して実施する。	
22		人権に関わる課題を知識として学ぶだけでなく、日常生活において態度や行動に現れるような人権感覚の育成に努める。	3.4	3.1	3.7	3.7	学期ごとに生徒参加型の人権LHRを充実させる。分かりやすい人権講演会を実施する。公開授業や研修会も必要。	
23		教育活動全般に通じて、情報の活用に伴う情報モラルの育成に努める。	4.1	3.3	4.4	3.6	生徒会中心の情報モラル向上の取り組みを継続していく。他者の人権侵害をゼロにする。生徒の生活改善や家庭学習の充実にもつなげる取り組みを進める。	
24		キャンパスカウンセラーと連携を密に取り、悩みを抱える生徒の支援体制を作る。	4.4	3.7	4.3	4.3	カウンセラーの指導内容を必要部署にて共有する。生徒が相談しやすい環境づくりの一環として、今後も年度当初にカウンセリングを1学年全生徒に体験させる。	